

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 ミハイロヴァ・ユリア  
論文題目 異文化コミュニケーション場面における「compliment／ほめ」とポライ  
トネスの質的研究——日本人と欧米人の接触場面を中心に  
論文審査委員 糟谷 啓介教授、イ・ヨンスク教授、石黒 圭准教授

### 1. 本論文の内容と構成

本論文の主題は、日本語母語話者と非母語話者の中で「compliment／ほめ」をめぐる生じるコミュニケーションの問題を論じることにある。背景としてポライトネス理論が用いられるが、それに対する一定の批判的スタンスも合わせて含みつつ、「ポライトネス」の枠組みのなかでの「compliment／ほめ」の位置づけを明らかにすることが目指される。

本論文の構成は以下の通りである。なお、節以下の見出しは省略した。

#### 第1章 問題の所在とその重要性について

- 1.1 はじめに
- 1.2 先行研究との結び付き
- 1.3 本研究の対象
- 1.4 本研究の主な問題と目的（要点）

#### 第2章 質的分析と理論的な枠組みの考察

- 2.1 研究方法：量的研究から質的研究へ
- 2.2 「グラウンディッド・セオリー」法：分析の行い方
- 2.3 客観性と主観性
- 2.4 回答者の社会的なパラメータとデータ収集における問題
- 2.5 インタビューの質問
- 2.6 インタビューの例（コンセプトの指摘を含めて）

#### 第3章 内的場面と接触場面における「compliment／ほめ」に対する反応

- 3.1 談話完成間によつての調査結果：量的研究
- 3.2 質的分析によつて分かったこと
- 3.3 接触場面における「compliment／ほめ」に対する返答と「会話的契約」視点から見られたポライトネス

#### 第4章 異文化コミュニケーションに起こりえる問題と異文化間の相違の再考

- 4.1 文化的解釈不能の「compliment／ほめ」の問題について：生まれつきの外見
- 4.2 「日本語がお上手ですね」
- 4.3 「Your English/German/French.....is good!」と言われるのは同じなのか？
- 4.4 「誠意」と「お世辞の文化」
- 4.5 男女関係における〈compliment〉と「ほめ・お世辞」：文化間の違い

#### 4.6 目上の人をほめることができるか？

### 第5章 Compliment と「ほめ・お世辞」を通して「ポライトネス」の理論へ

#### 5.1 「ポライトネス」の2つの見方

#### 5.2 「ほめ・お世辞」と「ポライトネス」の関係について

#### 5.3 「ほめ・お世辞」と「ポライトネス」：回答者の目を通した文化間の違い

#### 5.4 「ポライトネス」のグラウンディッド・セオリーと歴史的な発展についての考察

おわりに

参考文献

附録

「附録」には、行なったインタビューに関する資料が添付されており、回答者のリスト、インタビューの例（日本人・欧米人）、談話完成問のデータ等が含まれている。

## 2. 本論文の概要

第1章では、ポライトネス理論のこれまでの展開と「ほめ/compliment」に関する先行研究がまとめられる。そして、従来のポライトネス理論の問題点が指摘され、「ほめ/compliment」を適切に理解するための新たな視点が必要であることが論じられる。著者が問題にするのは、ポライトネス理論を集大成したブラウンとレヴィンソンの研究では「FTA (Face Threatening Act)：体面侵害行為」があらゆるコミュニケーション場面に潜在的に起こりうるものとして理解されていることである (Brown, P. & Levinson, S., *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge U.P., 1978)。ブラウンとレヴィンソンによれば、コミュニケーションの効率性と「体面侵害行為」の可能性は相互に対立しあい、反比例の関係にあるとされる。そこで、「体面侵害行為」におちいらずに、コミュニケーションの効率性を確保することが、いわゆる「ポライトネス」のストラテジーの目的となる。そこには二つの側面があり、「他者によく思われよう」とする他者評価の欲求のストラテジーが「ポジティブ・ポライトネス」であり、「他者に踏み込まれたくない」とする距離化や回避のストラテジーが「ネガティブ・ポライトネス」である。この枠組みによれば、「ほめ/compliment」は「ポジティブ・ポライトネス」のひとつとして把握され、その目的は「体面侵害行為」の可能性を縮減することであるとされる。

これに対して著者は、「体面侵害行為」の可能性がポライトネスのストラテジーの引き金になるという考え方に疑問を呈している。その一方、理論が抽象化していくことで、「ポライトネス」という概念そのものが現実離れしたものになる恐れがあることを指摘し、「ポライトネス」をより現実のコミュニケーション場面に即したものとして理解すべきであると主張する。本研究の対象である異文化間での「ほめ/compliment」の問題に関していえば、異文化コミュニケーションの参加者がどのような表現を「ほめ/compliment」として認定するか、「ほめ/compliment」をどのように使用し、どのように理解しているか等々を明らかにすることが研究の目的となる。第1章の後半では、「ほめ」と“compliment”の概念が整理され、本論文で「ほめ/compliment」という表記をとった理由が示される。

第2章では、本研究を進めるにあたって採用された「グラウンディッド・セオリー」の内容

が紹介され、著者が実際に行なったインタビュー調査を例にとり、その方法の有効性が確認される。「グラウンディッド・セオリー (Grounded Theory)」とは、社会学者アンセルム・ストラウスが開発した質的研究法のひとつである。量的研究が大量のデータを統計的に処理することにより一定の定式化を図るのに対して、質的研究では、比較的少数のデータに基づき、事象に関して数値化できない定性的側面に注目する。その研究方法にはいくつかのものがあるが、「グラウンディッド・セオリー」は、データの外側から理論を適用するのではなく、データの内側からデータを説明する「セオリー」を作り出していこうとする研究方法である。その分析法には一定の手順があり、データの切片化、コンセプトと個別特性への注目、カテゴリーの抽出、などがあげられる。データとしてインタビューが用いられる場合、最初から最後まで固定された質問表を用いる量的研究と異なり、「グラウンディッド・セオリー」においては、研究が進むにつれて新しいコンセプトが明らかになれば、今までとは異なる質問項目を立てることが要請される。そして、最終的に新たなコンセプトが立てられなくなった時点「理論的飽和」が達成された段階とみなし、研究の総括がおこなわれる。次章以降では、この「グラウンディッド・セオリー」にもとづいて、欧米人 31 名、日本人 22 名と行なったインタビュー内容を分析し、「ポライトネス」と「ほめ/compliment」の関係についての新たな理論化を図ろうとする。

第 3 章では、まず初めに、「ほめ/compliment」に関する談話完成間による調査の結果が示される。日本人は「ほめ/compliment」に対して否定的回答（例：「いいえ、そんなことはありません」）を用いるとよく思われているが、この調査によると、けっしてそうではないことが示された。欧米人と日本人の違いは「受け入れ」か「拒否」かの違いではなく、「受け入れ」の強弱の程度の差でしかない。この発見を指針として、著者はインタビュー内容の質的分析にとりかかる。個々の回答者とのきわめて濃密なやり取りのなかから浮かび上がってくるのは、日本人が「ほめ/compliment」を受け入れることもあるし、欧米人がそれを「ダウンプレイ」することもあるという事実であった。たとえば、インフォーマルな場面で、言われたことがお世辞だと思わない場合には、「ほめ」に対して「ありがとう」と答えることは、日本人にとってもむしろ自然なことと感じられている。重要なのは、「ほめ/compliment」を受け入れるか受け入れないかという点にあるのではなく、「相手を無視しないこと」と「言われたことを認めないこと」との間に見られるジレンマであり、これは日本人にも欧米人にも等しく当てはまる。

このように「ほめ/compliment」の行動の文化特定のでない側面が明らかになったわけであるが、それに対して第 4 章では、異文化コミュニケーションの場面において「ほめ/compliment」に関して生じる問題を取り上げる。たとえば、どのような題材や内容の発言を「ほめ/compliment」として使用するかには、文化間に違いがある。たとえば、身体特徴についての発話は、欧米人にとって「ほめ/compliment」として理解にくいもののひとつである。第 4 章の後半では、何人かとのインタビューから次第に浮かびあがってきたコンセプトである「お世辞」に関する考察がなされる。回答者とのインタビューのなかで、日本文化のなかでは、誠実さに欠ける〈fake compliment〉、いわゆる「お世辞」が多く用いられることが指摘された。しかし、「お世辞」であるかそうでないかの判断は、現実にはきわめてむずかしいことがある。実際にコミュニケーションの場面では、誠意をもって相手を「ほめ」ようとする場合でも、相手がそれを「お

世辞」だと受け取って、否定を繰り返すということが生じる。とくに異文化コミュニケーションの場面では、そうしたコミュニケーション・ギャップが起きやすい。著者は、外国人の日本語教育のなかで、こうしたコミュニケーション・モードの衝突が引き起こす問題に関する具体的なガイドラインを示すべきであると提案している。

第5章では、これまでの議論をふまえて「ポライトネス理論」の再構成が試みられる。ここでは具体的なコミュニケーション場面に参加する者の視点が重視されている。

(1) ポライトネスには、特定の文化に限定されない「本質的な側面」とそうではない「社会・文化的な側面」の二つがある。前者は誠実さや敬意と結びつき、後者は形式的な社会規範と結びつく。

(2) ポライトネスはけっして衝突を避けるためのメカニズムではない。「体面侵害行為」は必ずしもポライトネスの引き金になるわけではない。

(3) 言語的なポライトネスは話者の意図を隠すマスクとして機能することがあるが、その使用は文化によって異なる程度で現れるため、異文化コミュニケーションにおいて問題になりやすい。

最後に著者は、ポライトネスはけっして一定不変のものではなく、社会・文化的な現象であり、歴史のなかで常に再構成されてきたことを強調している。そして、さまざまな面で *informality* を高く評価する近代社会が発展するにしたがって、ポライトネスの意味付けが変化しつつあることを指摘し、社会規範としてのポライトネスが簡素化していく可能性を示唆している。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の通りである。

第一に、ポライトネス理論の観点から「ほめ／compliment」の現象を詳細に分析し、一定の成果を挙げたことである。「ほめ／compliment」には、特定の文化に固定されない一般的な枠組みがあるという指摘に関しては、さらに考察を重ねる必要があるだろうが、異文化コミュニケーション理論では、個々の文化の構成要素が固定的なものとしてとらえられるために、現実のコミュニケーション行為の柔軟性が軽視される反面、異文化間の差異が強調されすぎるという著者の指摘は重要なものであると思われる。

第二に、多くの回答者との綿密なインタビュー調査を行なって、異文化接触場面において「ほめ／compliment」が引き起こすさまざまな局面をていねいに整理して分析したことである。この論文のもっとも優れた部分は、個々のインタビューを質的研究の観点から徹底的に分析したところにある。具体的な調査内容をふまえているために、論点がたいへん明瞭に提示されている。

第三に、ポライトネス理論の問題点を実証的に明らかにするという問題意識と研究目的が明確である点である。この点で、著者が「ほめ／compliment」を研究対象に選んだことが有利に働いている。なぜなら、先行研究では、「ほめ／compliment」が「ポジティブ・ポライトネス」のストラテジーのひとつとしてとらえられているが、「ほめ／compliment」と「体面侵害行為」との相関性はけっして自明のものではないからである。

第四に、研究目的を達成するために、「グラウンディッド・セオリー」という質的研究法を用いるという新機軸に取り組んだことである。社会言語学では「グラウンディッド・セオリー」を

用いた研究はまだ数少ないので、本論文を先駆的な試みとして高く評価することができよう。

しかし、本論文にも問題点がないわけではない。以下のことが指摘できる。

第一に、個々のインタビューの分析を行なった箇所では、時おり冗長な叙述が見られる。また、データの提示と議論の展開が平行してなされているために、整理不足のままに論証が提示されているところもある。さらに、個人的な経験や主観的な意見が交えられることもあり、そのことがかえって議論の説得性を弱めている。そうした箇所では、論点をさらに整理して、より緊密な議論の展開を心がけるべきであったらう。

第二に、多数の回答者との綿密なインタビューを行なったことは評価できるが、調査対象者の母集団になんらかの偏りがあるように感じられる。質的方法による研究が恣意的なものにならないようにするためには、この点への配慮がさらに必要ではないかと思われる。

第三に、「グラウンディッド・セオリー」はたいへん高度な方法であり、それを使いこなすには一定の訓練を通じた習熟が必要であるが、本研究では「グラウンディッド・セオリー」の利点が十分に生かされていないうらみがある。たとえば、「データの切片化」による「カテゴリーの抽出」の作業は、中途半端なところがあるように思われる。この点で、方法論のさらに精緻な適用が望まれる。

けれども、こうした弱点があるにせよ、本論文が優れた研究成果であることには変わりがない。多くのインタビュー調査を地道に行ない、そこから得られた膨大なデータを根気よく解読していった著者の努力は、この論文という形となって十分に報われている。現在ポライトネス研究は盛んに進められているが、本論文は「ほめ／compliment」という視点を導入することで、そこに新たな学問的知見をもたらしたといえよう。

#### 4. 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の著者が一橋大学学位規則第8条1項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

## 最終試験結果の要旨

平成 21 年 7 月 8 日

受験者：ミハイロヴァ・ユリア

最終試験委員：糟谷 啓介、イ・ヨンスク、石黒 圭

平成 21 年 5 月 27 日、学位請求論文提出者 ミハイロヴァ・ユリア 氏の論文および関連分野について、本学学位規則第 8 条第 1 項に定める最終試験を行なった。本試験において、審査員が提出論文「異文化コミュニケーション場面における「compliment／ほめ」とポライトネスの質的研究——日本人と欧米人の接触場面を中心に」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、ミハイロヴァ・ユリア 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、ミハイロヴァ・ユリア 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。